

とびっきりの笑顔に会った日

広島県 J A広島北部青壮年連盟 橋本 寅夫

皆様、こんにちは。J A広島北部の橋本です。J A広島北部青壮年連盟（以下J A広島北部農青連）の本部がある安芸高田市吉田町は、三矢の教えで有名な戦国武将・毛利元就の生誕の地でもあります。毛利元就には有名なエピソードがあります。元就は、晩年の三人の息子と呼ばび、三矢の教えを説いたといひます。元就は、一本の矢を折り、息子たちに伝えました。「一本の矢はたやすく折れる。しかし、三本集めた矢はなかなか折れない。この矢のように力を併せて三人の息子が協力しなさい。」と伝えました。この三矢の教えのように、農青連・J A・小学校の三者が協力して活動しています。

また、千代田支部がある北広島町には、ユネスコの世界無形文化遺産に登録された「壬生の花田植」があり、飾り牛による代かきや早乙女たちによる田植えは、多くの人に感動を与えています。また、実りの秋に行われる収穫に感謝した「神楽」など、農業を主体とした文化芸能の町として県内外に知られています。我々J A広島北部農青連は、このような環境の中で、農業を通じた様々な活動を行っています。

活動の一つに、「国際ボランティア活動」があります。広島経済大学の故・松田教授の行っていた「ネパール学校建設支援」のお手伝いをしています。世界で一番標高の高いヒマラヤ山脈にある国・ネパールをご存じでしょうか。国土の大半が木に覆われていますが、ヒマラヤ山脈に連なる傾斜を整地した段々畑が幾何学的な模様を描いています。

ネパールの首都・カトマンズから東へ約30kmの所に、田んぼが一面に広がる村があります。数十年前の日本とよく似た農村風景の中、行き交う村民は素朴で笑顔が絶えません。しかし、僻地の山村において、十分な教育を受ける機会に恵まれない実情を知りました。自分の名前も書く事が出来ず、簡単な本すら読めない子供達が数多くいました。勉強がしたくても近くに学校がない為、険しい山道を四時間以上かけて遠くの学校に通わなければならない状況でした。村には電気も無く、文房具も不十分です。豊かな日本で育った私達は、発展途上国の惨状に衝撃を受けずにはいられませんでした。

このような事実を知り、我々がネパールに学校を造る「国際ボランティア活動」に協力し始めたのは、二十年前になります。学生と協同で米作りをし、売上金を小学校建設資金に充てました。努力の末に、「マイナポカリ村のジャラデビ小学校」を建てることができました。米作りをボランティア活動に活かすことで、農業や発展途上国の実情を、日本の未来を担う学生達に理解してもらうきっかけになればと思います。また、今までの活動で開校した小学校は9校となりますが、元気に子供たちが小学校へ集まり、知識を得た子供たちが未来を支えている事を願っております。

もう一つの大きな活動は、食農教育です。都市部はもとより、田舎においても子供達の多くは農業を知りません。土に触れ、みんなと協力して作物を育てる楽しさや、自然の厳しさを学ぶ機会が少ない事が気がかりでした。

そんなある日、小学校の校長先生から「農業体験をしたいんですが」と相談を受けました。全校生徒186名での農業体験です。一～二年生はミニトマト・ナス・キュウリ、三年生はヒマ

ワリ・大豆、四年生はヘチマ、五年生は米、六年生はジャガイモ、たんぼ学級はキュウリ・ナス・ヒョウタン。そして、全員でのサツマイモ作りを頼まれました。子供達に指導する立場の先生も、野菜の種や苗を植える時期を知らなかったため、畑・田んぼの確保や土作り・苗作りを緊急に進めました。

そんな状況で始めた農業体験でしたが、もう十六年になります。今では、野菜に収穫量も増して、学校給食に使用されるまでになりました。自分達で育てた野菜に愛情を持ち、作物に感謝する事が何よりも大切な事です。

今、若い親世代の食への価値観が問題視されています。核家族や生活習慣の変化に伴い、家族団らんで食卓を囲む機会も少なくなりました。スーパーマーケットに行けば、季節に関係なく年中野菜も手に入るため、野菜の旬を知らない子供達も多くいます。作物は、土や空気や水などの健全な自然がある事で初めて育ちます。そして、作物が育つまでには時間がかかります。消費者の都合で、作物の生産を早めたり遅めたりすることはできません。そんな「自然の法則」を、子供達が体感してくれたらと願わずにはられません。そして、広島県産の農産物のファンを、一人でも多く作りたいものです。

そして次は、新しい稲作に向けて私達がおこなってきた活動をご紹介します。

平成十七年から新たな農林水産政策を推進する『鉄コーティング種子』のたん水直蒔きを、始めました。初年度は、近畿・中国・四国農業研究センターで、鉄コーティングした『あきろまん』の種子を18アールに表面条播しました。鉄コーティング種子の、たん水直蒔きは同センターが開発した技術で、種モミの比重が大きく浮かんでこない為、土壌とよく密着します。ただ、除草には充分気をつける必要があります、怠ると後でつらい草取りがまっています。しかし、育苗が不要で低コストという利点もあり、現在まで続けています。

本年度の稲作りは、四年前に導入した「苗箱まかせ」で取り組みました。苗箱まかせとは、水稻育苗箱全量施肥法『水稻で本田の施肥チッソの全量をあらかじめ育苗箱に入れておき、移植時に苗と共に肥料を本田に持ち込む方法』に基づき開発したコーティング肥料です。この肥料は播種時に七百グラム（一箱）ほど苗箱に入れておくだけで、基本的には追肥の必要はありません。

施肥方法は、育苗箱に床土→苗箱まかせ→灌水→催芽初→覆土の順で慣行より一手間苗箱まかせを入れるだけで、水田への元肥は必要ありません。また育苗時の水管理も、慣行育苗より少なくて済みます。

「育苗まかせ」の特長として

- ①「播種時」にチッソの全量素肥施肥が可能で、追肥を省力化することが出来ます。
- ②水稻の根元に接触施肥されるため、肥料の効き目が高く、チッソ成分で約10～40%程度の大幅減肥ができます。
- ③今までのやり方よりも、肥料の利用率高いため、環境負荷が少なくなります。
- ④安定した養分供給により、本田での生産ムラが少なくそろった稲が育ちます。
- ⑤肥料の利用率高いので、雑草への肥料供給が少なく、雑草発生が少なくなります。

以上①～⑤による 全量施肥により追肥労力が省略でき、省力効果は長期栽培（百二十日）ほど大きくなります。肥料の利用率高いため、地下水や大気への負荷を軽減できる「環境を守る肥料」といえるでしょう。でも、一番はコスト低減が魅力的なのです。省力を合わせたトータルコストは低くなる点が魅力的です。

私達の「稲作」は『慣行元肥チッソ施量調整の苗箱まかせ』と、『苗箱まかせのみ』の2種類を、圃場で栽培しています。

「手間をおしむ事なく愛情を持って栽培しなさい」と習いましたが、T P P等、農業をとりまく環境は、ますます厳しく成ります。しかし、作物栽培をプロとして行う私達が、食の安心・安全も考え、さらに経営の安定を図り、農作物を栽培しつづける事が日本の「食」をささえる事になると思われます。今こそ大切な食文化を守る為に、三つ矢の教えのごとく、皆が協力する時ではないでしょうか。